111　鶴見川源流の泉と多摩丘陵の谷戸をめぐる（距離約 11.0km）

鶴見川源流の泉

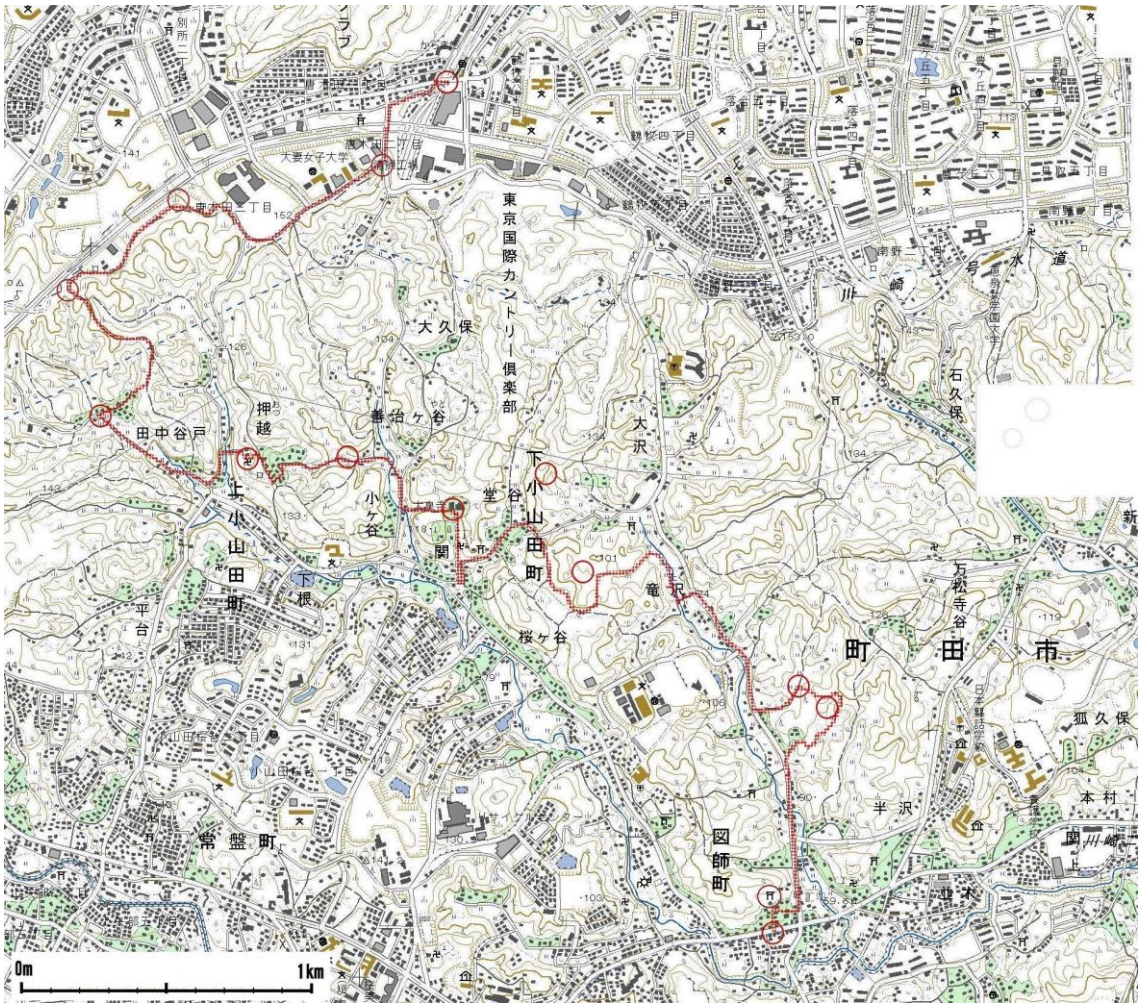
多摩丘陵の浅い浸食谷の周囲は、斜面樹林が接する集水域であり、水源でもある。

その一例である鶴見川の谷戸の泉をめぐる。今では、開発によって失われた谷戸も多いのだが、これまで大切にされてきた（多摩丘陵に残された）谷戸の泉をたどって、その地形の成り立ちと自然に触れる。

【道順】

小田急電鉄多摩線　唐木田駅→よこやまの道入り口→よこやまの道から多摩ニュータウンを展望→唐木田給水所→鶴見川源流の湧水池→正山寺→押越谷戸の湧水池→八石地蔵尊・大泉寺と観音堂→小山田緑地つり橋→小山田緑地溜池と湧水→神明谷戸→五反田谷戸湧水→図師熊野神社の偽りの几号水準点→図師バス停→バスで横浜線淵野辺駅 or 町田駅へ出る

ルートマップ


大妻女子大学
東京国際カントリー倶楽部
大久保
善治ケ谷
押越
田中谷戸
上小山田町
小ケ谷
下小山田町
堂谷
大沢
竜沢
桜ケ谷
下根
平台
常盤町
図師町
半沢
万松寺谷
石久保
狐久保
本村
町田市
0m
1km

地図豆知識：谷戸

谷のことを谷（ヤ）、谷戸（ヤト）、谷津（ヤツ）、谷地（ヤチ）、谷那（ヤナ）などと呼ぶことは、よく知られている。関東地方の世田谷、四谷、扇ケ谷などもその例である。後者のヤツは、鎌倉などに特有なもので、東北地方などではヤチ、他の関東地方ではヤ、ヤトと呼び、谷戸の文字を当てることが多い。

東日本で使われるヤチは、湿地が始まりだと思われる。その湿地に類するものを西日本では、フケ、ウダ、ムダなどと呼ぶ。

また、ヤチの周辺のなどにある崖とその上面をハケ、側面をハバ、ママと呼ぶことも周知のことである。大間々、真間などがそれである。そして、山から水のしみ出している場所を、ニタと呼ぶ。仁田沢などがその例である。

その谷戸（ヤト）とは、丘陵地が浸食されて形成された谷状の地形である。また、そのような地形を利用した農業とそれに付随する生態系を指すこともある。主に日本の関東地方および東北地方の丘陵地で多く見られる。そこは、居住と耕作に適した地として利用され、自然が保存されてきた。

地図豆知識：河川の源流

川について、地形図のきまりでは、「河川は、平水時の水流の幅が 1.5m以上のものを表示する。」となっている。そして、そのこと自体も現地で、ひとつずつ調べたことではなく、空中写真を元にして表現したものである。

一方の源流はというと、もっと小さな流れから始まることが多いはずだ。したがって、地形図上の川の始まりが実際の源流地点と一致することは、極めて稀なことになり、源流地点は、原則として地形図に表示された水色の先端のもっと先となる。

したがって、本当の源流は地形図に表現された水流や等高線で読む谷の深さなどからあたりをつけて、現地を訪ねなくては特定できない。一般登山用の地図であっても、通常は山登りに関する情報は精査するが、その他の情報は官の地形図をそのまま使用している。水流に関しても登山道に近いところはともかく、ほとんどは地形図に従っているはずだから、源流を知るにはやっぱり現地を訪れて足で稼ぐしかない。

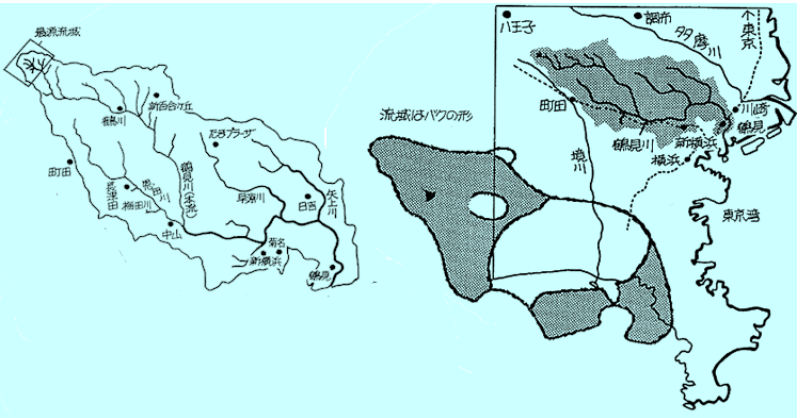
鶴見川の最上流付近の地形図

図のほぼ中央〇印が、源流の泉のあるところ。しかし、そこは地図に表現された河川最上流とは一致しないし、じっさいの源流は、泉の更に上流の谷戸の奥にあるはずだ。

地図豆知識：鶴見川

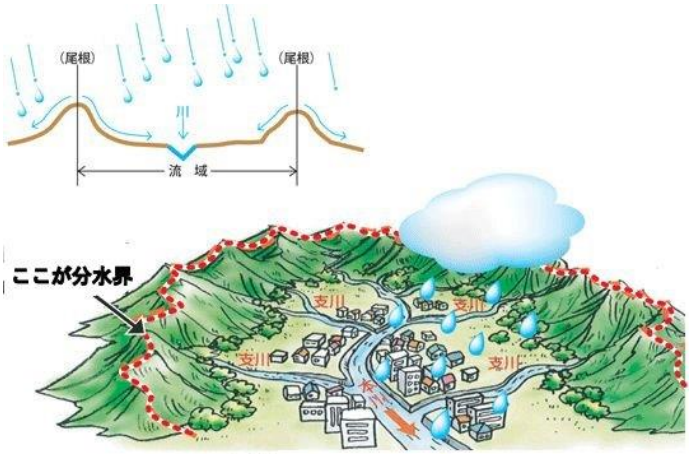
鶴見川は典型的な都市河川で、町田市北部の源流に発し、多摩丘陵・下末吉台地を刻み、横浜市鶴見区生麦で東京湾に注ぐ一級河川である。鶴見川の源流流域は、町田市北部の多摩丘陵に、広がっている。源流の谷には「泉の広場」があり、流域交流の拠点として親しまれている。泉に発する小川には、ホトケドジョウやハヤなど、清流の魚が暮らしている。護岸整備とともに多自然型の川づくりが進む下手の流れには、町田の市の鳥に指定されたカワセ ミたちの姿もあるという。

丘陵の森は、広大な保水域として、中下流の洪水抑制にも寄与し、田畑や団地を包む森には、キツネやムササビ、オオタカも暮らしているという。おもしろいことに鶴見川の流域は、その外形が斜め左後ろからみたバクの形に似ている。



地図豆知識：河川の流域

雨水が川に集まる大地の広がりを「流域」と呼ぶ。流域は大地に刻まれた水循環の単位、治水対策の基本単位である。



分水界・流域というもの（鶴見川流域ネットワーキング HP から）

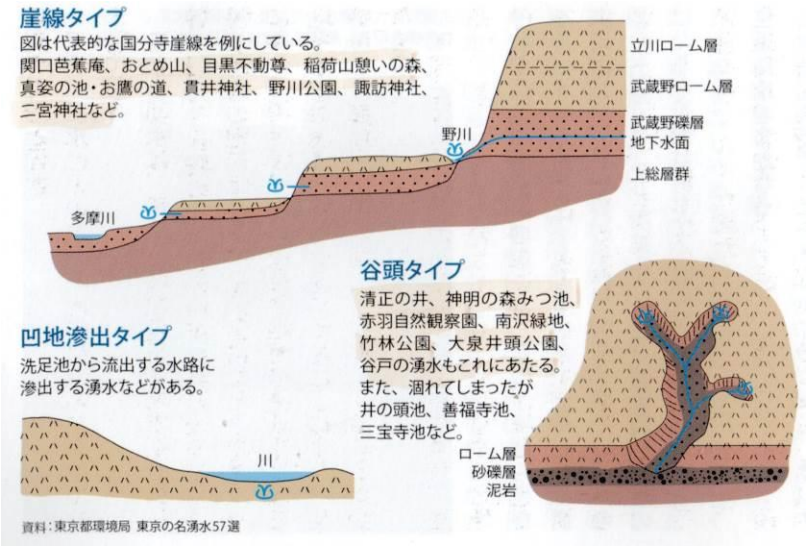
地図豆知識：鶴見川の湧水

湧水は、以下のようなタイプに分類される。鶴見川のそれぞれの湧水がどのタイプのものか観察してみるといい。

崖線タイプ：川によって浸食された台地の段丘崖や断層面に露出した砂礫層から湧くもの。砂礫層の下部は水を透しにくい粘土層や泥岩になっていることが多い。湧水を供給するかん養域はごく狭い範囲である。

谷頭タイプ：台地面上の馬蹄型や凹地形などをした谷頭（台地面の谷の奥）の地形的に水を含む層が露出したところから湧くもの。地下水が湧水する力で谷頭地形が形成されることが多く、かん養域はごく広い範囲である。

凹地滲みだしタイプ：川床や凹地に地下水や伏流水が圧力で滲みだしてできる湧水。かん養域は地下水や伏流水に関連した広い範囲である。



湧水の分類（東京都環境局「東京の名水 57 泉」から）

【街歩き解説】

①唐木田駅

小田急唐木田駅から始めて、泉をつなげて多摩丘陵を南へ縦断するように町田市へと歩く。駅からよこやまの道へと向かう通の左手下には、都心へ電車を送り出す唐木田電車庫が広がる。そのまま大妻女子大まで進んで、よこやまの道入り口に到達する。ここにある案内看板で、これからのルートを確かめてから、さらに西へと道をたどる。

②よこやまの道へ

よこやまの道は、多摩市域の属するようなのだが、なぜか路肩には町田市公共基準点がある。注意していると、丘陵が一望できる柵の向こうにも町田市公共基準点がある。ここなら、町田市域である。そのようなことからも、道すじがおおむね鶴見川の分水界の尾根にあることを実感する。

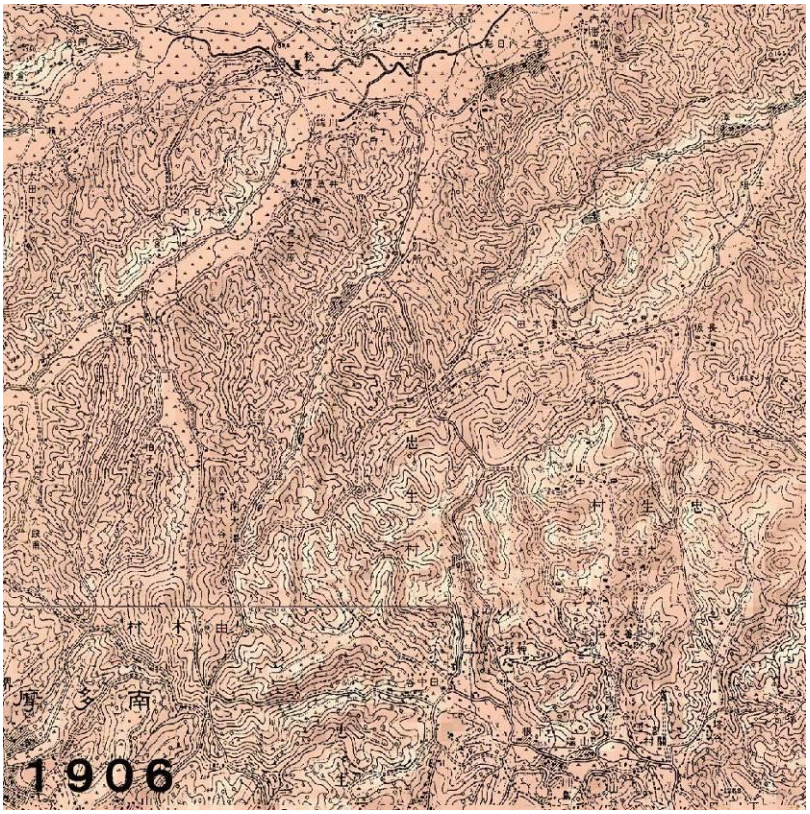
よこやまの道　／　路肩にある町田市公共基準点

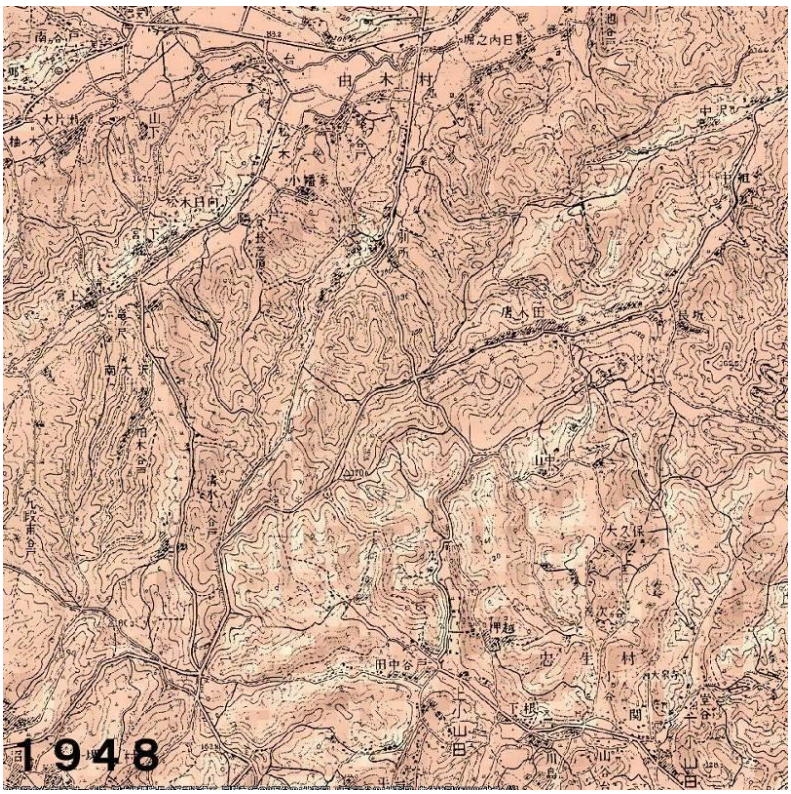
③多摩ニュータウンを見る

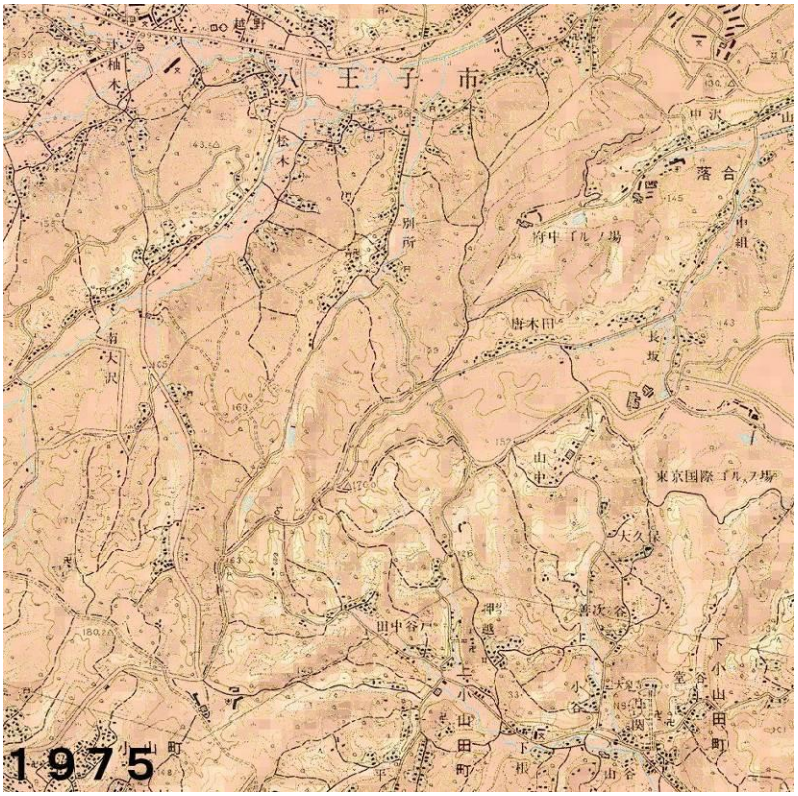
　わずかに上り下りしながら進むと、多摩ニュータウンが一望できる場所に出る。かつて、辺り一面に雑木林が広がっていた多摩丘陵に、今はどこまでも家並みが続く。その後のよこやまの道は、少し丘陵地らしくなるが、それでも北側には多摩ニュータウンの家並みが広がる。この辺りまでは、行き交う人も多い。

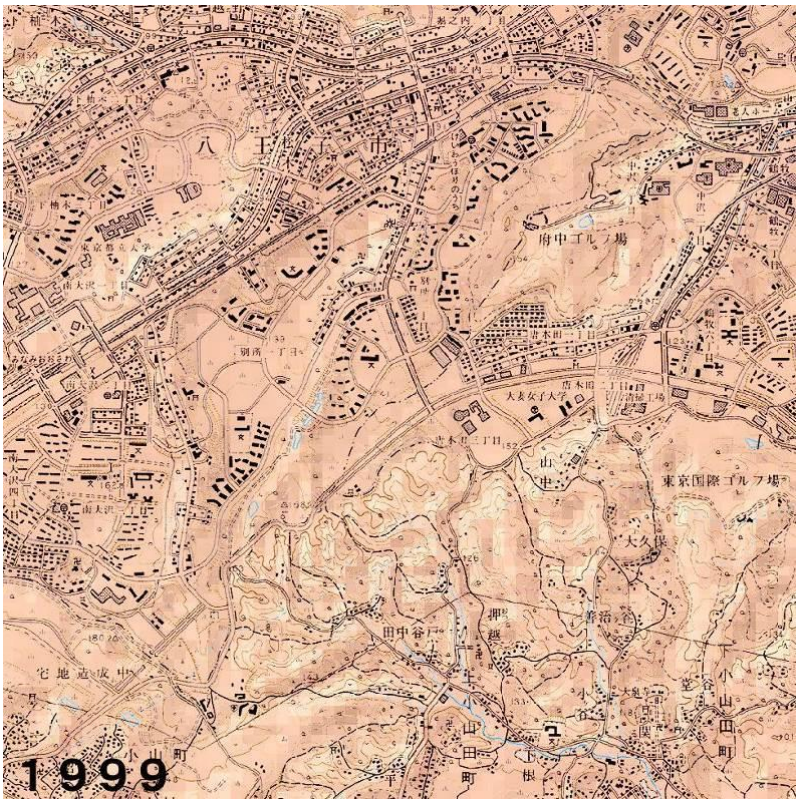
　ここで、地図を広げて、多摩ニュータウンのこれまでを読むといい。

よこやまの道から多摩ニュータウンを見る


1906


1948





多摩ニュータウンの地形図（「武蔵府中」：「今昔地図」を使用）

1906 年から 1975 年までの地形図を大きくみるなら、農地開発が谷戸から一部の丘陵地へと進行しているものの、それほど急激な変化は見られない。そこには、広葉樹林を主とした丘陵地とその谷間に耕地が広がるのどかな風景が予想される。ところが、1999 年地形図で辺りは一変する。多摩ニュータウン開発である。ただし、じっさいの多摩ニュータウンは 1966 年（昭和 41 年）に事業に着手している。1975 年地形図の北端を見れば、その開発の片鱗が見える。と同時に都心へと向かう送電線が伸び、ゴルフ場の進出も始まっている。

すっかり開発の進んだ 1999 年地形図であるが、中央に曲線を描いて東西に伸びる「南多摩尾根幹線道路」の南では、旧来からの多摩丘陵の自然や風景が予想できる。

谷のことをいう「谷戸」地名に注目すると、1948 年の地形図では、「南ケ谷戸」「池谷戸」「清水入谷戸」「柏木谷戸」「九段浦谷戸」「田中谷戸」と多く見つけられるが、1975 年地形図や 1999 年地形図では「田中谷戸」だけになる。後者の地形図では、多摩丘陵が開発され人工的な地形が多くなり「ヤト」そのものが減少してしまっている。

同時に、謂れのありそうな旧来の地名の多くも姿を消して、1999 年地形図では「押越」「善治ケ谷」などを残すのみである。開発に伴って消滅するのは、自然だけでなく地名も然りである。

④鶴見川源流へ向かう

唐木田給水所の高まりを越えて鶴見川源流方向分岐へと進む。分岐点には、鶴見川流域の最高地点（標高 168m、山王塚）を示す基準点がある。よこやまの道から分岐すると、やっと丘陵歩きらしい道になる。落ち葉を踏んでの道は、緑が多い季節なら野草や草花にも会える楽しみもある。

鶴見川源流へと向かう

⑤鶴見川源流の湧水池

尾根道から集落のある谷戸へと下りる。源流はどこかと探しながら谷戸の風景を散策する。そして湧水池へと向かう。地図には文字どおり「田中谷戸」とあって、指を拡げたように数本の谷が広がる。谷が集まった辺りに湧水のある池があって、そこから清らかな水が下流へと流れ落ちる。池の中央の水面には、小さな盛り上がりができるほど水が噴出しているのが見える。さらに谷奥までたどれば源源流？もあるという。

田中谷戸を見る　／　鶴見川源流の湧水池

⑥正山寺へ

　かつて日本一汚れたと称された川の源流とは思えない澄んだ流れを見ながら道を下り、田中谷戸集落を抜けて、正山寺参道へと進む。参道と石段が、まっすぐ延びる正山寺を参詣したら、本堂を回り込むようして、押越（おつこし）集落方向へと抜ける。寺の裏からもと来た方向を振り返ると、谷戸の向こうに緑深い多摩丘陵の風景が見える。かつて、この辺りにはどこにでもあったいい景色だ。

正山寺上から多摩丘陵の森を見る

⑦押越谷戸の湧水池

　正山寺裏手の小さな尾根を越えると、突然大きな屋敷が現れて、ちょっとびっくりする。かつてこの地を治めた小山田氏ゆかりのものだろうか？　などと勝手に想像する。押越集落から善治ケ谷（ぜんじかやと）集落へと下りる道脇に、小さいながら湧水池らしきものがある。

押越谷戸近くの大きなお屋敷　／　押越谷戸の滲み出すような湧水池

⑧八石地蔵尊・大泉寺と観音堂

いったん通りへ出てから大泉寺へと向かう。木立に囲まれた大泉寺山門はみごとだ。階上には十六羅漢像が安置されているのだという。大泉寺参道脇にも池があるが、ここは湧水池ではないようだ？　そして、大泉寺参道の東には、八石地蔵尊、素人目にも造りや彫刻が見事な観音堂がある。隣は上根神社（かさねじんじゃ）。

大泉寺山門　／　小山田緑地のつり橋

⑨小山田緑地へ

堂谷集落を抜けて小山田緑地へ。緑地サービスセンターの手前、左手の小さなお稲荷さんのある道を進めば、つり橋やアサザ池がある。吊り橋上から見下した谷地には、それこそ滲みだすような湿地や小さな流れが見える。道を戻って小山田緑地サービスセンターで休憩し、地図やパンフなどをいただく。

⑩小山田緑地溜池と湧水

小山田緑地サービスセンターから始まる快適な緑地内の道を進む。道の左手は深い雑木林、右手は運動場でその先には富士山の見える丘がある。道から分岐して溜池方向へと下

りる。谷には、溜池のほか、上池・下池が連なる。溜池の上流にある手入れされた竹林の手前に最上流の湧水地点がある。

小山田緑地　富士の見える丘

小山田緑地上の池下の池　／　小山田緑地最上流の湧水ポイント

⑪神明谷戸へ

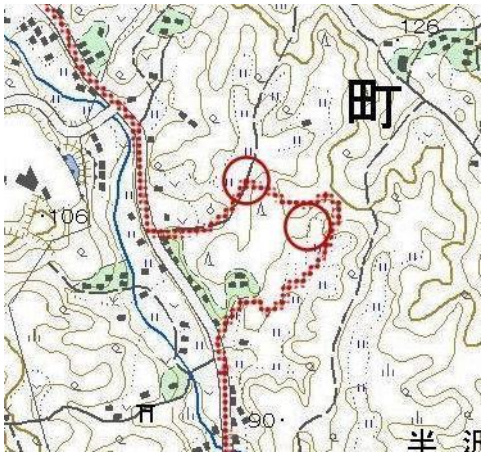
小山田緑地を出て、滝沢集落の中ほどに地蔵様があるのを見て、神明谷戸へ入る。沢奥へと続く道路脇には、泥岩と砂岩が互層になっていることがよくわかる露頭がある。厚い泥岩層が不透過層の役割を果たして、湧水を作ることを確認する。

谷戸の奥まったところ、谷頭に神明谷戸の池がある。さらに上流から浸みだした水が溜まったものだ。

神明谷戸の湧水池　／　五反田谷戸の湧水池

⑫五反田谷戸の池

神明谷戸からちょっとした尾根を越えて五反田谷戸へ出る。ここの谷頭近くにも同じような小さな池があり、その上流からしみ出す流れもある。これで、谷戸の泉めぐりは終わる。



神明谷戸と五反田谷戸　／　図師熊野神社、偽りの几号水準点

⑬図師熊野神社偽りの几号水準点から図師バス停へ

バス道路へ出て南下する。バス道路西側の図師熊野神社に几号があるとの情報があったが、これは偽物。誰かがいたずらしたもののようだがこれも確認して、図師バス停へ出て終わり。

+＊＊＊+　オフィス　地図豆　yamaoka　mitsuharu　+＊＊＊+